

視点移動分析による遊歩道景観の評価事例

梶原 美里¹・藤木 栄治²・藤原慎吾³・角野 昇八⁴・内田 敬⁵

¹学生会員 大阪市立大学大学院工学研究科（〒558-8585大阪市住吉区杉本3丁目3-138）

²正会員 工修 大成建設（株）

³学生会員 北海道大学大学院地球環境科学研究科

^{4,5}正会員 工博 大阪市立大学大学院工学研究科

河川遊歩道や緑地遊歩道などの遊歩道景観を評価する手法では、アンケート結果の分析による方法が一般的である。しかし、この手法では遊歩道を利用する人々が、具体的にどこを見て、何を感じて、そのような回答をしたのかを把握することは難しい。本稿では、このような人々の心理を把握する手法として検討しているビデオカメラとボイスレコーダを用いた視点移動分析についての遊歩道を対象とした実験事例を紹介する。

キーワード: 遊歩道, 景観評価, 道頓堀川, 大泉緑地, 視点移動分析

1. 背景と目的

近年、人々の景観への意識が変わり、社会基盤構造物も単に機能を満たすだけでなく、景観も考慮した構造物であることが求められるようになってきた。しかし、アンケートのような客観的な評価では、対象物のどこを見て感じた意見であるかを把握することは難しい。

そういった背景から角野らは、人々の遊歩道景観の評価を把握するために、河川遊歩道を対象に、近畿圏の3河川において調査を行った。この調査で、ビデオカメラを用いて歩行者の視点の移動を分析することによって河川遊歩道景観を評価できる可能性が示された。画像を見てもらいながら感想を尋ねる本方法によれば、記憶に頼るアンケート調査に比べ、より具体的に正確な情報を得ることができるものと考えられる。

本研究では、河川遊歩道として道頓堀川遊歩道を、緑地遊歩道として大泉緑地前遊歩道を調査することによって、人々がどのような要素から遊歩道景観を評価しているかを明らかにすることを目的とする。

2. 視点移動分析について

視点移動分析とは、歩行者の頭に付けた超小型ビデオカメラによって撮影した画像を歩行者自身に見てもらい、その感想やコメントを集約、分析して評価の内容を探ろうとする、著者らによって考え出された手法である。

まず、実験参加者はビデオカメラを頭に付けて対象地点を歩き、思ったことや感じたことをその場で口に出す。この感想は実験参加者が首からひもで下げているボイスレコーダに記録される。

その後、実験参加者は自分が撮影したビデオ画像を見

て、その時思ったことを思い出してもらい、ビデオのカウントを見ながら、何時何分の時にこう思った、というように感想シートに書く。

こうして得られた感想シート、実験参加者が撮影したビデオ画像及びボイスレコーダの感想を合わせて分析し、実感参加者がいつ、どこを見て、どう思ったかということをもとめて対象地点景観の評価をしようとするものである。

3. 調査概要

(1)対象地点

a) 道頓堀川遊歩道

道頓堀川は大阪市中央部を東西に流れる全長約7kmの河川である。道頓堀界限には多くの飲食店が集まり、ミナミの繁華街としてにぎわいのある地域である。

大阪市が行っている道頓堀川水辺整備事業により道頓堀川沿いに遊歩道が整備され、2004年12月から一部の遊歩道（戎橋から太左衛門橋間の70m）が供用開始された。本研究で調査対象としたのは、この戎橋から太左衛門橋区間の遊歩道である。遊歩道は川の両側に各幅mから8mで整備され、上の段は灰御影石、下の段は桟橋をイメージしたウッドデッキで、約m高さの異なる上下二段構造になっている。

実験参加者には、図-1のように、右岸の遊歩道の下の段から上の段に行き、戎橋を渡り左岸の遊歩道を上の段

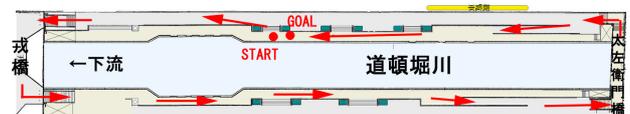


図-1 道頓堀川遊歩道の調査コース

から下の段を歩いて、再び上の段に行き、太左衛門橋を渡って、再び右岸の遊歩道を上の段から下の段を歩いてスタート地点に戻るといったコースを歩いてもらった。

b) 大泉緑地前遊歩道

大泉緑地は大阪府堺市にある森林公園である。昭和年に、大阪都市計画緑地（服部、鶴見、久宝寺、大泉）の一つとして計画が策定されたもので、現在も地元住民のレクリエーションの場として親しまれている。

調査対象としたのは、大泉緑地への導入部として、地下鉄新金岡駅から大泉緑地までの東西に広がる約50mの遊歩道である。平成2年度に駅が一番近い西側部分にプランターや花などを設置する整備がなされた。そして、平成14年度に大泉緑地に近い東側部分に、遊具のあるミニ公園などを設置する整備がなされた。続く平成年度にはその間の中央部分が、波打った曲線状の歩道やピオトープなどの整備がなされた。

実験参加者には図-2のように、西側の平成2年度整備部分から、平成5年度整備部分、平成4年度整備部分に向かって、西側から東側に向かって歩いてもらった。なお、各整備区間の間には、遊歩道と垂直に交差する一般の道路がある。



図-2 大泉緑地遊歩道の調査コース

(2)調査内容

調査件数は表-1に示す通りである。

道頓堀川は昼と夜の二つの顔があると言われているので、昼の部（10～16時）と夜の部（18～21時）の二部構成で実施した。調査日は遊歩道の一部が供用開始された直後の2004年12月である。

大泉緑地では、普段遊歩道を利用する時間帯と思われる10時から17時の間で調査を行った。調査日は2004年11月である。

実験参加者は道頓堀川では、大阪市立大学工学部を中心とした学生、大泉緑地では地元住民と府の職員である。

表-1 調査件数

	道頓堀川		大泉緑地
	昼	夜	
男性	8	12	7
女性	4	1	6
合計	25		13

4. 調査結果

(1)感想の分析の仕方

ビデオ画像から実験参加者の位置と見ている方向を分

析して、実験参加者の場所を始点、見ている地点を終点とするベクトルにして対象コースの地図の上に表示した。実験参加者の感想（ボイスレコーダ及び感想シートによる感想）は「良い評価」、「悪い評価」と、そのどちらでもない「ノーマルな評価」の3種類に分けた。

この作業を実験参加者ごとに行い、全実験参加者で同じ地点による同じ意見はまとめて表-2～6の上段に示すような図にした。なお、1人だけの感想は少数意見として棄却した。

(2)分析結果

a)道頓堀川遊歩道

道頓堀川での視点移動分析結果のうち昼の部を表-2、夜の部を表-3に示す。ここで、良い評価は、ノーマルな評価は、悪い評価はで示している。図中の番号はそれぞれ表の下の感想と対応している。また、違う場所で得られた同じ感想は、1-1番、1-2番というように、枝番号を付した。また、その感想が得られた場所から実験参加者が見たと思われる風景の写真を、参考のために載せている。

これらより、昼、夜に関わらず、建物の裏側が見えてしまうことについて悪い印象を与えていることがわかる。ただし、昼の部ではその評価は回あるのに対して、夜の部では回しかなく、昼の方が目立っている。

また、昼の部では、の番のように、川の汚さに目が行って悪い評価が多いが、夜はの番のように、ネオンなどの光に視線が行き、逆に良い感想が多くなり、川の水の汚さに関する感想はなかった。

木の橋である太左衛門橋は昼夜とも好評だった。また、昼夜とも、大勢の人でにぎわう戎橋と比べて、太左衛門橋は人が少ないように感じる意見が多かった。

なお、調査を行った期間は、遊歩道完成直後であったため、このように建物の裏側がそのまま見えている状態だったが、本稿執筆の2005年8月現在は遊歩道から店へ入れる入口や、遊歩道通行者に見てもらうための看板などができているため、調査当時とは様相が変わっていることを付記しておく。

b)大泉緑地前遊歩道

大泉緑地での視点移動分析結果のうち平成年度区間を表-4に、平成14年度区間を表-5に、平成15年度区間を表-6に示す。道頓堀川の場合と同様に、図中の番号はそれぞれ表の下の感想と対応している。

これらより、最も変化に富んだ遊歩道であって区間長も長い15年度区間では、良い評価であれ、悪い評価であれ、感想が多いことがわかる。このことから、ある一定の区間長（規模）を持った整備がなされなければ、住民による認知度が低くなるとの当然の帰結を得ることができる。

全区間の感想を見ると、12年度区間のの1番、14年度区間のの2番、15年度区間のの2番から4番のように、自然物に対する良い評価が多い。しかし、同じ

ピオトープを見た5年度区間の 1番と、 2番の感想では、「自然的で非常にいい」と、「草が伸びているので、草刈りしないといけない」というふうに、意見が食い違っている。このためピオトープに対する、さらなる啓発活動が必要と思われる。

14年度区間の 3番（「あれはなんだろう」）は実は散水栓であるが、これは銀色の立方体でモニュメントのようにも見えるため、いぶかしげに思う意見が多かった。 2番のミニ公園に関して、後ろに保育園があるのになぜミニ公園が存在するのか、疑問に思う意見が多かった。

15年度区間の 4番は、藤棚風の構造物を見ての印象であるが、完全に屋根を被っているものでなく、横木が格子状にあるだけであるので、雨除けにも日除けにもならないことを悪く思う意見が多かった。

また、それぞれの区間の間には、遊歩道と垂直方向に一般道路があるため、15年度区間の 5番のように、遊歩道の断絶を残念に思う意見があった。角野ら²⁾の城北川での遊歩道アンケート結果のように、あまり途切れることのない遊歩道の設計は、遊歩道整備において重要なポイントと考えるべきであろう。

なお、この調査中、平成15年度区間では、向い側の建物のスケッチをしている人がいたため、 6番のような意見が出ている。

5. 結論

本研究から以下のことが明らかとなった。

道頓堀川遊歩道から見る水面は、昼と夜で評価に違いが現れ、昼は水質の悪さに目が行くものの、夜はネオンの光の舞台効果によって、良いイメージを与えている。

また、完成直後のこの時期では、建物の裏側が見えてしまうことについて悪い印象を与えている。さらに、擬似木製の太左衛門橋はおおむね好評であるが、戎橋に比べてそこでの人の賑わいが少ないことがプラスではない印象を与えている。

大泉緑地前遊歩道に関する結果からは、一般的に社会基盤整備において、ある一定の区間長や規模を持った整備でなければ、住民による認知の程度が低くなるとの結論を得ることができる。また、特に遊歩道整備に関しては、途中で途切れることのない長い区間長が望まれていることに留意すべきである。

植栽などの自然物に対する評価はおおむね好評であるが、人の手が入っていない印象を与えるピオトープについては、そのことについて良とする評価と否とする評価に分かれ、ピオトープに関するさらなる啓発や教育活動の必要性を指摘することができた。

このほかにも、整備の結果が整備者側の意向どおりに必ずしも受け取られるものでないことがあることも明らかになった。

参考文献

- 1) 角野昇八、藤塚佳晃、藤木栄治：ビデオ画像を用いた河川環境直接評価法の提案、平成16年度土木学会関西支部年講講演概要、2004
- 2) 角野昇八、藤木栄治、内田敬：アンケート調査に基づく都市の河川遊歩道の役割とその望ましい姿、第27回土木計画学研究発表会講演集、2003

表-2 道頓堀川(昼の部)の視点移動分析結果



表-3 道頓堀川（夜の部）の視点移動分析結果

<p>良い評価</p> <p>①①①②② ネオンが水に映ってきれい</p>	<p>ノーマルな評価</p> <p>△① 人が多い</p>	<p>悪い評価</p> <p>□① 室外機が目立つ</p>
<p>階段のライトがきれい</p>	<p>△② 人がいない</p>	<p>□② 戎橋に比べて人が少ない</p>
<p>木の橋が優しく感じる</p>		
<p>街灯が多くてきれい</p>		

表-4 大泉緑地（平成12年度区間東側）の視点移動分析結果

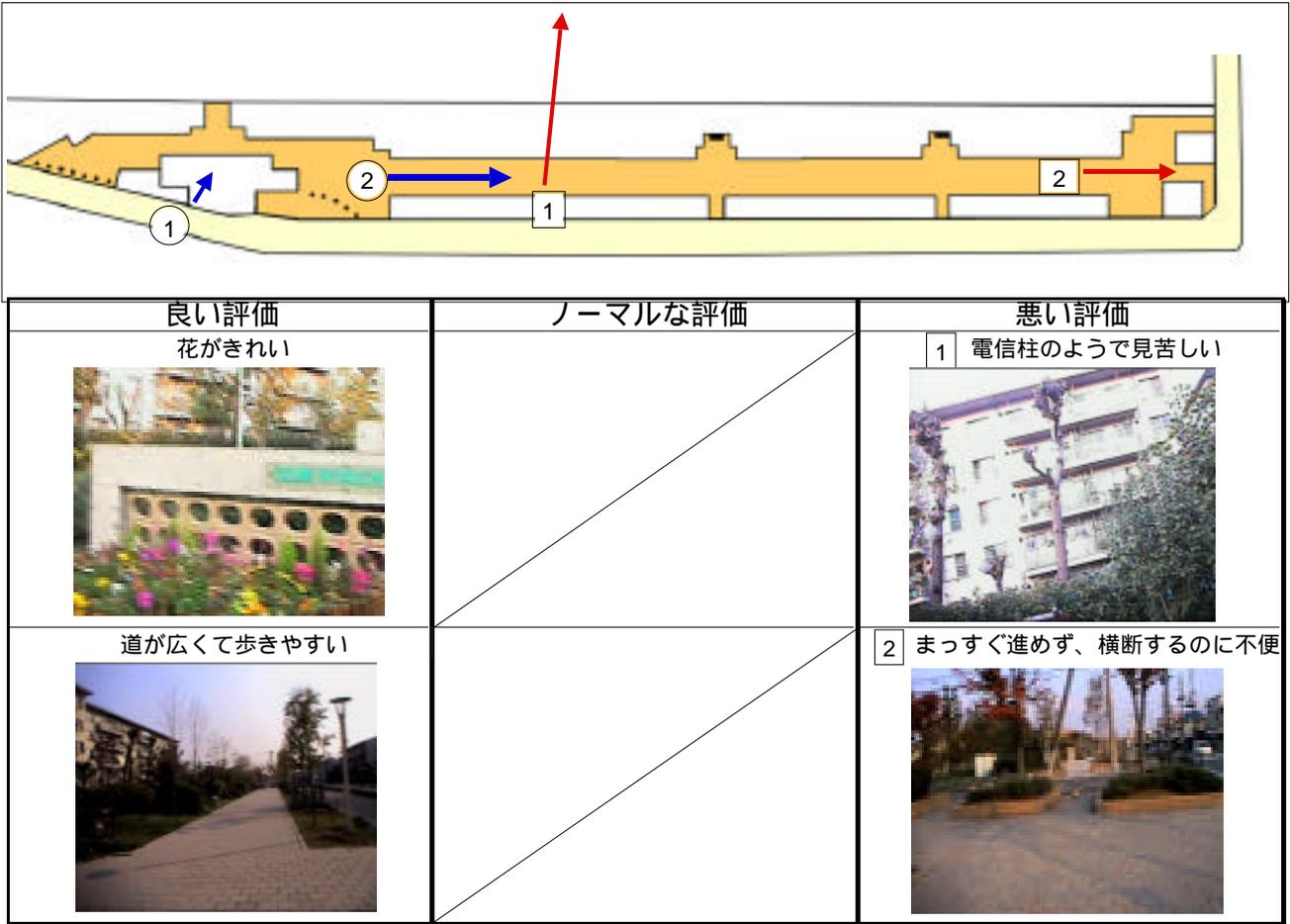


表-5 大泉緑地（平成14年度区間東側）の視点移動分析結果

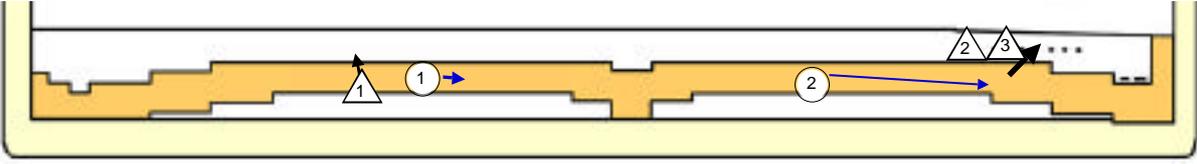
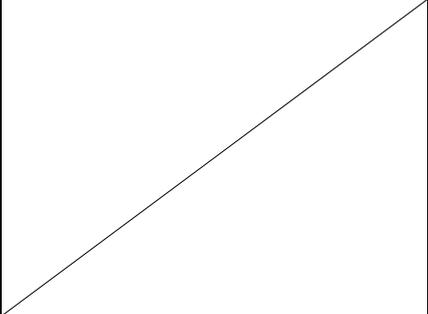
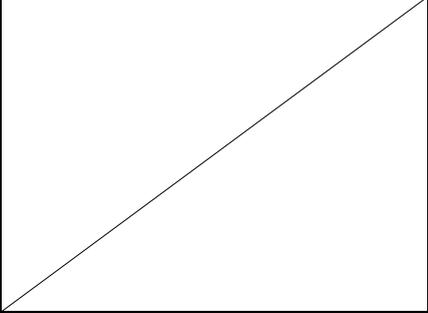
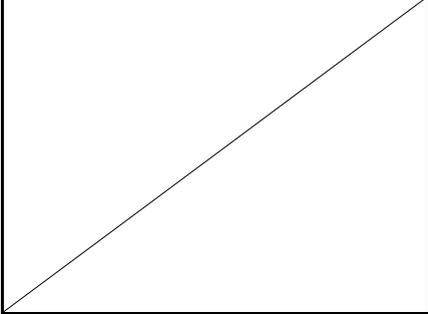
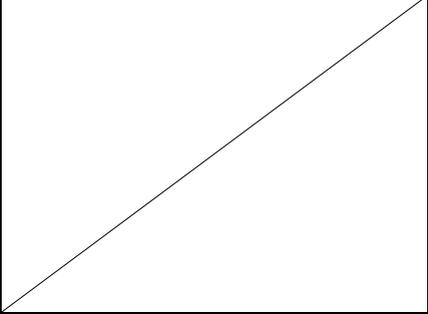
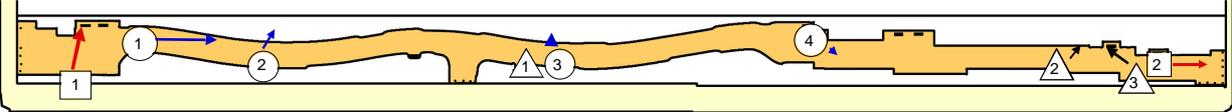
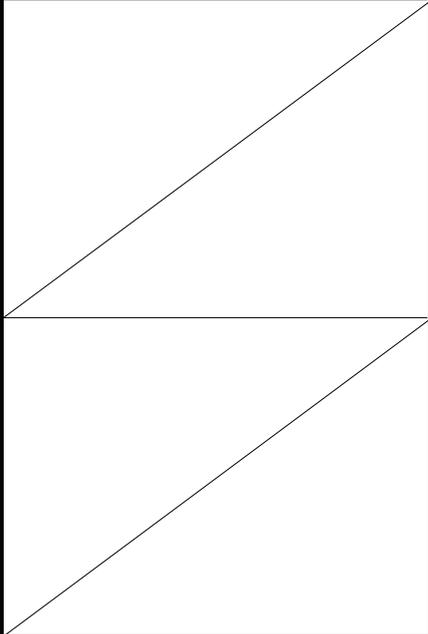
		
良い評価	ノーマルな評価	悪い評価
<p>舗装の色合いがよい</p> 	<p>△1 あれはなんだろう</p> 	
<p>大泉緑地の緑や銀杏がきれい</p> 	<p>△2 ミニ公園が歩道としては新しく子供が遊べる</p> 	
	<p>△3 必要なさそうだが、後ろの保育園の影響？</p> 	

表-6 大泉緑地（平成15年度区間東側）の視点移動分析結果

		
良い評価	ノーマルな評価	悪い評価
<p>雰囲気良く気持ちがいい</p> 	<p>⚠️ 草が伸びているので草刈りをしないとイケない</p> 	<p>1 日陰にはなるが、雨の時に不便</p> 
<p>ススキがあり、自然な感じ</p> 	<p>⚠️ 2 こんなベンチもあるのか</p> 	<p>2 歩道断絶がもったいない</p> 
<p>自然的で非常によい</p> 	<p>⚠️ 3 何の絵を描いているのだろうか</p> 	
<p>高木がよい</p> 		